

日本人英語学習者の第一言語へ第二言語が及ぼす影響

——初学者レベルの学習者を対象とした検討——

石 川 佳 浩*

1. はじめに

近年、社会や経済のグローバル化が急速に進展する中で、我が国の英語教育政策は教育界からのみならず産業界を始め様々な領域から大きな期待と要望が寄せられており、一層求められている。教育方針や方法論、入学試験の方法に至るあらゆる領域に及ぶ改革や提言が矢継ぎ早になされている昨今の状況は、いわば効果的な英語教育の推進は難航していることを示す鏡となっていると言えるだろう。教室の外へ一歩出てしまうと英語が日常生活においてほとんど使用されないわが国においてはむしろ母語を活用した英語学習が再度見直されてもよいのではないだろうか。英語が外国語環境である日本社会においては、教室外におけるインプットの量の不足から暗示的な学習ではなく、明示的な言語知識を活用した英語学習の利点を再考する必要があるだろう。日本の教室環境においては、母語による客体化が必要不可欠であると解する。G. Cook 氏もその著書『英語教育と「訳」の効用』（2012）において、母語使用の重要性を主張している。

しかし、英語学習で母語の役割を大きなものと捉えれば、そのポジティブな側面、およびネガティブな側面の両面を理解しておく必要がある。第二言語習得論の分野において、当初は母語が非常に重要なものととらえられていた。言語教師たちにより積極的に研究されていた（オ

ドリ、1995, pp. 16–18）。それ以降、第二言語習得研究においては、母語の重要性や転移についての議論が活発になされてきた。初期の議論では、学習者の誤りのほとんどは母語からの転移であるものと考えられていたが、第一言語から第二言語への転移だけでなく、第二言語から第一言語への転移も報告されている（Cook, 2005）。

そこで、本論文では、日本で英語を学習する学習者に対して、母語を活用した外国語教育を提供する可能性と影響について検討するための材料となるよう、第二言語（L2）学習が第一言語（L1）にどのような影響を及ぼすのかについて、実証的なデータに基づいて考察することを目的とする。以後、本稿中では、第一言語（L1）を日本語、第二言語（L2）を英語として議論を進める。

2. 先行研究

2.1 V. Cook の Multi-Competence

Selinker (1972) は、目標言語の母語話者とは異なる学習者の L2 による発話を“Interlanguage” (IL) と名付け、その存在を推定した。IL は学習者の L1 や L2 の母語話者の L2 から独立した状態であると想定された。Vivian Cook 氏は中間言語の問題点として、まず IL について述べられるときに、L2 使用者の「不完全」な言語という説明がよくなされるが、学習者の言語はその母語話者のものとは本質的に異なるため、母語話者と比較して不完全だという評価は不当だと指摘した（Cook, 2002）。

* 広島経済大学教養教育部講師

そこで Cook 氏は、Noam Chomsky の言語習得論を参考にし、Multi-Competence という術語を考案した (Cook, 1991)。Chomsky の Competence は単一言語を想定しているが、Cook 氏の Multi-Competence はそれを、複数言語を包摂するように拡大したものである。Cook 氏は、自身の考案した Multi-competence という用語の定義をその後の研究の進展とともに修正してきた。当初は「二つの文法を備えた複合的なこころの状態」(1991) と定義されていたが、「一個人のこころの中にある二つ以上の言語知識」(1996) となった。新定義の提示は、「文法」という言葉により、統語のみを連想させるのを避け、また二言語から複数言語をも対象とし、「知識」とすることにより固定的なものではなく流動的なものであることが含意された。その後、地域社会をも射程にいられた定義も登場したが、本稿においては言語政策や教育政策全体を扱うものではないこと、また言語知識には、流動性があることを肯定する立場から、1996年の個人の言語知識を主に想定する。

Multi-Competence では、学習者の心のなかにある複数言語 (L1 と IL) を一つのまとまりのある体系として捉え、二つの言語は重なり合うかあるいは統合していると考え (Cook, 2002)。そのため、L1 と IL は相互に影響を与えたと考える。古くから議論されてきた「転移 (transfer)」あるいは「干渉 (interference)」と呼ばれるものは L1 から IL への影響であり、それについては多くの研究例がある (オドリン, 1995)。

一方、転移とは逆方向の影響も報告されてきており、逆行転移 (backward transfer, back transfer, reverse transfer) と呼ばれている。この逆方向の影響については、あまり研究の蓄積がなく、定訳も定まっていない (逆方向干渉 (羅, 2015a, 2015b, 2017)、逆転移 (尹, 2016)、逆行転移 (村端, 村端, 2016; 鈴木, 2013; 山田,

2010))。本稿においては、逆行転移という訳を使用する。

2.2 羅 (2015a) (2015b)

羅 沢宇氏の一連の研究において、逆行転移現象について興味深い報告がされている。

まず、羅 (2015a) においては、羅氏が、インターネットや教科書、学術書、そして辞典等から収集した日本語 (L2) の影響を受けていると考えられる中国語 (L1) で書かれた文を収集し、羅 (2015b) においては、羅 (2015a) で収集した文を使用して中国人日本語学習者を対象に性別、出身地域、日本語レベル等の参加者属性調査と非文判定アンケート実験を実施している。結論としては、逆行転移と見られる現象が確認され、まとめると、女性のほうが男性より影響を受けやすいこと、第二言語の影響は入門～初学者レベルでピークに達することが観測された。入門～初学者レベルに影響がピークに達するという、直感に反する結果について、羅 (2015b) では、外国語が上達することによって、脳も余裕をもつことができ、自己モニタリングができるようになったからだと推測している。

2.3 尹 (2016)

尹 (2016) においては、韓国語を L1、日本語を L2 とした状況での逆行転移現象について報告している。現代韓国語においては、日本語の「～てもらう」にあたる表現は非用または不適切であるが、韓国人日本語学習者はそのような文を許容または産出するのを実験した研究である。この研究においても逆行転移現象は報告された。逆行転移が起こった原因のひとつとして、尹 (2016) では、「パラダイムの合理化」を挙げている。つまり日本語と韓国語を対象とした際に、日本語の「～てもらう」に対応する韓国語表現が欠缺しているために、その空白を

埋めるために「a/eo batda」表現が出現したのではないかと説明している。尹（2016）で特筆すべきところは、その多様なデータ収集方法である。事例実験、翻訳文実験、許容度実験、作文実験と四種類の実験方法を実施しており、本研究はそのうち許容度実験を採用した。

2.4 山本・宮川（2023）

山本・宮川（2023）は、日本国内で学ぶ日本人英語学習者を対象とした珍しい研究である。中学生を実験参加者とし、英作文で学んだ構成の型は日本語で作文をするときにも活用されるのかを調査した。その結果、英作文での「型」の使用率に比して日本語作文での使用率はほとんど伸びがなく、影響を与えるとは言えないことが示唆された。本研究は日本国内で行われ、逆行転移に言及した数少ない研究であるので紹介したが、本稿が言語の転移に関して扱うのに対し、山本・宮川（2023）は英作文のストラテジーに関する知識を扱っている点で守備領域が若干異なっている。

3. 方法論

3.1 実験の目的

本研究の目的は次のとおりである。

- ① 初学者レベルの日本人英語学習者にも第二言語の第一言語への影響が見られるか検証すること
- ② その影響が見られやすい文法項目を指摘すること
- ③ そのような影響について学習者自身ができるように認識しているかについて明らかにする

3.2 参加者

日本の大阪に所在する国立大学の第一学年に在籍する大学生20名に協力を依頼し、そのうち10名から回答を得た。全員小学校の教員免許取

得を目指している学生たちであった。産出語彙レベルテスト（Laufer & Nation, 2016, 末尾の資料③参照）により語彙力を測定すると、参加者の産出語彙サイズは2,000語未満であった。これは当該産出語彙テストの尺度では最も初級である。また、3.3.1節で後述の属性調査アンケートに英語力の参考となる資格試験等の成績を記入する欄を設けたが、多くの参加者は英語力を証明するものを持っていなかった。したがって、上記の語彙レベルテストの結果から、参加者の英語力は初学者レベルであると判断する。

また、分析・記述における便利を考え、アンケートに回答した参加者から順に連番をふった。以下、個々の参加者について言及する際にはその番号を代名詞的に使用することとする。

3.3 素材

本実験では、参加者にアンケートに回答してもらった。アンケートは2部から構成されていた。1つは属性調査アンケート、もう1つは容認度判断課題であった。属性調査アンケートと容認度判断課題の回答内容を突合し、それぞれの属性ごとに回答傾向が異なるかどうかについて分析をすることを想定するものであった。

3.3.1 属性調査アンケート

属性調査アンケートでは、性別や年齢、出身地、英語力に関することや英語との接触度合いや経験、日本語での読書・作文経験等について尋ねた。末尾の資料①を参照されたい。

属性調査アンケートを実施する着想や多くの質問については、羅（2015b）を参考にした。また属性調査アンケートの質問6「日本語以外が母語の人と同居していますか？」は Kinberg（2005）での家族が転移に影響を及ぼすという記述から着想を得ている。

アンケート末尾にインタビュー実験の依頼をし、協力を申し出てくれた1名に面接調査を別

日程で実施した。

3.3.2 容認度判断課題

容認度判断課題の質問項目には、水谷信子(1985)より引用した英語母語話者が産出しがちな誤文を使用した。この(水谷, 1985)は日本語教育研究の立場から外国人日本語学習者の日本語学習あるいは教育に資する目的で書かれた本である。日本語と英語のそれぞれの文法的、あるいは構文の特徴から生じる誤りについて、両言語を比較して論じている。本書を予備実験のアンケート作成の参考文献として選定した理由は、文法項目の絞り込みに使用するためには、

当該書籍のように文法項目別にわかれている書籍から例文を引用することが効果的であると考えたためである。当該書籍の構成は次の表1のとおりとなっている。

容認度判断課題は、すべての質問をひとつの様式に収めると質問数が非常に多くなってしまったため、参加者の負担等を考え、AとBのふたつの様式に分割した。様式Aと様式Bとに誤りの原因となる文法的及び構文の特徴を含む文をほぼ同数ずつ含むように分割した。問題総数はいずれの様式とも33問となった。当該課題では、水谷(1985)から引用した英語母語話者が

表1 水谷(1985)の構成

第1章		文の構造と主語
	第1節	主語の立てかた
	第2節	事実志向と立場志向
	第3節	主語の顯示と暗示
	第4節	実際の発話における文の形
第2章		時に関する比較
	第1節	過去と完了
	第2節	Present perfect tense と「～た」
	第3節	Progressive form と「～ている」
	第4節	Progressive form と Immediate future
第3章		受動態に関する比較
	第1節	受動態の用法
	第2節	受動態の諸問題
第4章		否定に関する比較
	第1節	部分否定の方式
	第2節	理由・目的の否定
	第3節	否定疑問に対する答え
第5章		接続に関する比較
	第1節	'instead of' と「かわりに」
	第2節	「から」と 'because'
第6章		待遇表現に関する比較
	第1節	待遇表現の分類と比較
	第2節	遠慮表現と親愛表現
	第3節	仮定法と例示表現

産出しがちな日本語の誤文を提示し、参加者にその許容性について、1から6のスケールにより判断してもらった。自然とを感じるものには「1」、不自然とを感じるものには「6」と回答するように指示した。言語使用が適切かどうかの判断に文脈が必要不可欠な場合には【状況】と書き、水谷(1985)における使用状況例や想定される使用状況を付記した。また、より質的な分析もできるように、誤りまたは不適切と考えた文を適切と考えられる文に訂正するよう指示した。末尾の資料②を参照されたい。

3.4 面接調査

属性調査アンケートの末尾において、面接調査への参加の依頼をしたところ、協力を快諾してくれた参加者がいた。そのためその参加者に後日、英語学習の母語への影響に関する認識と自身の経験に関する面接調査を実施した。

4. 実験結果と考察

様式 A と様式 B のアンケートシートは同数配布したが、回収したアンケートは様式 A が 4 枚、様式 B が 6 枚であった。ところが、様式 A に対する回答の中に 1 名、同じ数値ばかりを回答している信ぴょう性の低いものが含まれていたため、これを分析対象外としたところ、

分析に使用できるシートは様式 A では 3 名となった。そのため今回は、比較的多数のシートを回収できた様式 B のシートのみを分析対象とする。様式 B のシートにおいて、配布後に質問文の指示が不適切な問題が 1 問含まれていたことに気付いたため、当該問題は分析の対象外とした。今回は回収できたアンケートシートの枚数が少なかったため、統計処理には馴染まないものと解し、統計処理はかけないものとする。なお、質的分析のために、それぞれの質問文に対して違和感を抱いた箇所を指摘し、どのような日本語表現に変更すれば自然になるのかを記述するようにとの指示もしていたが、多くの参加者が未回答であった。

4.1 全体の分析

容認度判断課題の分析に際して、質問ごとに、参加者が回答したスコアの平均値を算出し、下記表 2 にまとめた。本実験で使用した日本語文については、すべて誤用または不適切とされる文であるため、本来はすべての質問文に対して不自然と感じ、「4」から「6」の回答を得る、すなわち容認度は低くなるはずである。したがって、平均値がスケールの中間となる 3.0 より低いもの、すなわち多くの参加者が自然であると判断したものについて主に考察する。

表 2 水谷(1985)より抜粋した質問文と各文に対する容認度の平均値

出題箇所		問題文	容認度の平均値
第 1 章	第 1 節	1, 誰かが私の足を踏んだ。	1.50
		2, 誰かが、(ドロボーが) 私の部屋に入った。	2.17
		3, 私の財布がとられた。	2.67
第 2 節		4, お隣の人がこれを私の子どもにあげました。	3.17
		5, 隣の人が私の子どもを世話をあげました。	5.33
		6, 母が私にセーターを送りました。	2.83
		7, 母が私に冬の衣類を送った。	1.50
		8, 私は昨日、新宿で映画をみました。	1.00
第 3 節		9, あの人はいいと思います。	3.40

		10, 私は何時に来るはずですか?	5.67
	第4節	(出題なし)	-
第2章	第1節	11, うちへ帰るとき着替えます。	3.50
		12, 疲れるとき, お茶を飲みます。	4.50
		13, 元気だったと言いました。	3.33
		14, 発展した国	4.67
		15, 痩せる人がいる。	4.83
		16, 手伝っていただけないかと思いました。	4.17
	第2節	17, 父は20年間死んでいます。	5.83
		18, いいえ, まだ食べたことはありません。	5.83
		19, 結婚してしまいました。	5.17
	第3節	20, 今先生の質問に答えています。	4.83
		21, 今電話で話しています。	3.60
	第4節	22, 川上さんは結婚しています。	4.40
23, 会社をやめていますか。		5.40	
第3章	第1節	(出題なし)	-
	第2節	24, あの人に紹介されたいです。	5.25
		25, 先生が私に読ませた。	3.17
		26, 恥ずかしがらせられました。	5.67
第4章	第1節	27, 全部わかりませんでした。	5.33
		28, みんな来ませんでした。	3.33
	第2節	29, お金を借りに行きませんでした。	5.67
		30, 好きだから飲みません。	6.00
	第3節	(出題なし)	-
第5章	第1節	31, あなたは, 弟をかわいがる代わりにいじめています。	4.33
	第2節	(出題なし)	-
第6章	第1節	32, 社長さんが会いたがっていらっしゃいます。	4.00
		33, 窓を開けてもらいたいですか?	6.00
	第2節	(出題なし)	-
	第3節	(出題なし)	-

※ (出題なし) となっている節は, 水谷 (1985) の該当箇所中に日本語 1 文単位で出題できる誤文例がなかったため, 出題しなかった。

表 2 に示した容認度のスコアの平均値より, 質問 1, 2, 3, 6, 7, 8 の容認度が 3.0 を下回っていることがわかった。以下, 順に検討する。

まず, 水谷 (1985) では, 英語と日本語の文

の作り方や主語の立て方を比較する際のひとつの柱として, 英語は事実志向型で日本語は立場志向型であるという観点を採用している。たとえば, 財布が盗まれたという場面で, 事実志向の強い英語では "Someone took my wallet." と

話し手の立場を問題にせず、ただ盗まれた事実のみを表現するが、立場志向の強い日本語では、「財布をとられた!!」と話者の立場から被害をとらえる。

質問1は、電車内で足を踏まれて「誰かが私の足を踏んだ。」という文である。この発話は、文法上は正しいものであるが、直接被害を訴えるときには用いられないのが普通であり、日本語母語話者は違和感を覚える。日本語においては被害事実の表明には受身が使用されるが、英語では普通 SVO が用いられ、受身は間接的で改まった印象を与える（水谷, 1985, pp. 18-20）。容認度は1.50となっている。

質問2は、英語では“Someone (A thief) broke into my room.”と SVO で表され、その直訳となっている。質問1と同じく、被害状況についての描写であるため、日本語においては通常受身が用いられ、不自然となるものである。容認度は2.17となっている。

質問3も質問1, 2と同じく話者の存在が問題にされていない。正しくは「財布をとられた。」となるはずである。しかし、この形が常に不適切かというそうではない。「国宝級の名画が盗まれたそうだ。」のように自己の被害事実として受け取らない場合には適切な文となる（水谷, 1985; pp. 21-22）。容認度は2.67となっている。

質問6は、「母が私にセーターを送りました。」という文になっている。適切な文は「母がセーターを送ってくれた。」となる。英語は事実志向であり、日本語は立場志向であるため、このような能動と受身の使い分けが生じるものと解する（水谷, 1985, pp. 28-29）。容認度は2.83となっている。

質問7は、「母が私に冬の衣類を送った。」という文になっている。主体に対する動作を表す「~てくる」という表現は英語母語話者が学習上困難を感じやすい。「~てくる」は他の動詞

の補助動詞として使用され、その動詞の示す動作が、話者にむかって行われることを示す。また、英語では、“My mother sent me winter clothes.”と“me”が表面上に出てくるが、日本語では通常、「~てくる」を用いた場合、「私に」は不要となる。したがって、「母が私に冬の衣類を送ってきた。」とすると、下線部が marked であるという印象を与える（水谷, 1985, pp. 29-30）。容認度は1.5となっている。

質問8は、「私は昨日、新宿で映画をみました。」という文になっている。過去の経験を語る「~てくる」であり、極めて立場志向性の強い用法である。これは話し手がなんらかの行為を受けたのではなく、話者自身の行為を聞き手に報告して同感を得ようとするときに用いられる用法である。英語では単に過去形を使用し、「~てくる」にあたるものは表すことができない。この日本語の発話に対する聞き手の応答としては「そう。それで?」「どうだった?」と次を促したり、関心を示したりするのが普通である。質問文にでてくるように「私は昨日、新宿で映画をみました。」では話者の心的態度が明確ではなく、聞き手は反応に戸惑い、違和感を覚えることが予想される（水谷, 1985, pp. 32-34）。

これらの容認度が自然よりにでた質問はすべて事実志向、立場志向の文であった。したがって、日本語と英語の転移研究をする場合には、事実志向、立場志向の別が大きな意味を持つ主語の立て方や文づくりが適しているのではないかという仮説をたてることができる。

また本稿における実験では、（水谷, 1985）の例文をそのまま機械的に使用したが、ある日本語表現を非用と説明されているものは日本語を学習している英語母語話者が、該当する日本語表現を産出するのが難しいというだけで不自然とまでは言えない可能性がある。例えば、「~てくる」の非用として説明される、質問8の

「私は昨日、新宿で映画をみました。」は、様式 B を回答した者全員がスケール中で最も自然であることを意味する「1」を選択していることから出題として不適切だったと思われる。そうすると、この文は本実験のように受容実験における適正性判断ではより文脈を強調して出題するか、あるいは作文実験のような産出実験においてどの程度産出されるかを実験すべきであったと考える。

4.2 個人の分析

まず、今回の参加者と英語学習とのかかわりを調べた属性調査アンケートの回答について、様式 A、様式 B のいずれかに回答した10名を対象に検討する。

質問12は、「英語学習は、学習者の日本語に影響を与えますか？また、その影響はポジティブなものだと思いますか？ネガティブなものだとも思いますか？」という質問であった。感覚的であるにせよ、逆行転移現象について学習者はなんらかの自覚があるのかどうかを尋ねることを意図した。興味深いことに、参加者全員が、影響があると思うと回答した。経験的に英語学習の影響を感じたことがあったのだろうか。今後、なぜそう考えるのか理由や要因を明らかにできるような追実験を実施したい。また後段のポジティブな影響かネガティブな影響かについては、回答者10名のうち、ポジティブと回答したのが7名、ネガティブと回答したのが1名、用意した選択肢を無視して独自の選択肢を作り「場合による」と回答したのが1名、無回答1名であった。多くの参加者が英語学習はポジティブな影響があると考えていることがわかる。今後の研究では、そのような印象を持つ理由や、「場合による」と答える者についてはどのような場合にどのような影響があると考えているのかについて追究したい。

次に、容認度判断課題の結果と属性調査アン

ケートの回答を総合的に考察してみる。

まず個人の容認度を見てみる。今回考察対象とした様式 B を回答した6名を容認度が高い者から順に並べると、1位が4番、2位が5番、3位が6番、4位が3番、5位が2番、6位が1番となる。

容認度の高かった、つまり正しく不自然寄りの評価をした傾向の強い、4番と5番と6番の参加者のうち、4番と6番は得意科目に英語が含まれている。英語が得意であることからポジティブな影響があり、正しく日本語文を評価できたと考えることもできる。しかしこの結果のみから早計な判断はできない。2位の5番の参加者は英語を得意だと回答しておらず、4番と5番の参加者は現代文も得意であると回答しているため、国語力により判定したとも考えられる。因みに6番の参加者は現代文を苦手科目として回答している。

容認度の低かった、つまり不適切なはずの文でも自然寄りの評価をした傾向の強い、1番と2番と3番の参加者のうち、1番と2番の者は英語を苦手科目として回答している。英語を苦手科目として回答した最下位2名が両方現代文を苦手科目として回答していることは、母語の言語感覚と英語の相関を示しているようにも思える。産出語彙レベルが2,000語未満であったこと、苦手科目であるから英語学習意欲が低いと考えれば、第二言語の習得レベルが初級から中級レベルの者が最も逆行転移の度合いが強いと報告した羅 (2015b) のように、初学者レベルの日本人英語学習者においても逆行転移現象が確認できたようにも思える。

5. 面接調査の結果

5.1 面接調査の実施

面接調査の参加者は、属性調査アンケートで後日の面接調査への参加協力を承諾してくれた、大阪に所在する大学の1年生の女子学生1名で

ある。彼女は中学3年生のときに実用英語技能検定準2級を取得しているものの、最近は英語力が確認できるような資格試験等は受験していない。語彙レベルを Laufer & Nation (2016) により測定したところ、2,000語未満と診断された。

面接調査の目的は、英語学習の母語への影響、あるいは学習者の内的言語の変化についての認識を探り、先のスケールによる研究の裏づけとなる情報を得ることである。また、面接調査で尋ねたのは下の表3のとおりである。

表3 面接調査での質問

1	英語学習は、学習者の日本語に影響を与えますか？
2	その影響はポジティブだと思いますか？ネガティブだと思いますか？
3	なぜ影響があると考えましたか？
4	どのような影響が考えられますか？なぜそう考えますか？
5	どのような人に影響が出やすいと思いますか？
6	英語学習が最も進んだのはいつですか？
7	その前後を比較して、日本語を話すときに英語由来の言葉を使うことが増えましたか？
8	あえてそのような言葉を使う理由があれば教えてください。
9	その前後を比較して、日本語を聞いているときの英語由来の言葉へのイメージが変わりましたか？

表4 面接調査での参加者の解答

1	影響を与えると思う。
2	ポジティブだと思う。
3	直感的に影響があると思った。
4	英語を訳すときに簡単な日本語文になるから、簡単な日本語になると思う。 例えば、日本語は程度を表すのに複数の語を使い分けるが英語は“very”などの副詞を使用したりするから、影響があると簡単な日本語になると思う。
5	英語力の低い人のほうが、影響が出やすいのではないか。
6	技能によって異なる。 Speaking は中学生のとき、Writing は高校2年生のとき、Reading と Listening は高校3年生のときに学習が進んだ。
7	使うことが増えた。例えば「リスponsして。」 楽しいから常に使っている。
8	たのしい。かっこいい。
9	違和感がなくなった。カタカナ語等調べて使うようになった。

5.2 面接調査の結果

面接調査で得た結果を下記表4にまとめる。

表4のとおり、協力者は、英語学習は母語に影響を与えると考えており、その影響はポジティブであると考えているが、その理由については「直感的」にそう思うと考えている。英語学習の効果として「簡単な日本語になると思う。」と回答している。Cook (2002, p. 7) には、“Hungarian children who know English write more complex Hungarian sentences than those who do not.”とあり、日本語母語の英語学習者の研究は筆者の知る限り存しないため判断でき

ないが、本研究の協力者が初学者レベルであるため単純な構造の英語のインプットが多いという事情が影響していると考えられる。英語の動詞は副詞を随伴させるという認識は、村端、村端 (2016) で紹介されている、Brown & Gullberg の研究で、英語は副詞を随伴させて動詞の様態・方法を表す Satellite-framed language である一方、日本語はそれらが動詞に組み込まれている Verb-framed language であると述べられている。どのような人に影響が出やすいかについては、英語力の低い人と答えている。これは、日中逆行転移の研究ではあるものの逆行転移についての研究である (羅, 2015b) の内容と符合している。先の先行研究の項でも述べたが、羅 (2015b) においてはその理由を「外国語の上達によって、脳も余裕を持つことができ、自己モニタリングもできるようになったのではないかと」分析している。7以降の質問では、「その前後を比較して」言語使用がどう変化したかを尋ねているが、協力者は技能によって習得が進んだ時期が違っていると答えたために、総合的に最も進んだのはいつか質問し、高校3年生、すなわち大学入試の時期であるという回答を得た。したがって、「その前後」とは「大学入試前後」という意味である。協力者は、英語学習が進むことで外国語由来のカタカナ語を自ら使用するようになり、また見聞きする場面でも違和感がなくなったと回答している。

上記のことをまとめると、協力者は文レベルよりもより小さな、語彙レベルでの変化しか認識していないこと、L2 (英語) の影響を受けた日本語は不自然な日本語ではなく簡単な日本語になると認識していることがわかる。質問4で協力者は英語の影響を受けると簡単な日本語になると思うと回答し、具体例として語の使い分けの話をしているため、「簡単な日本語」というのは語彙のことを指していると考えられる。また、質問5で影響が出やすいのは英語力の低

い人であり、その理由は上級者のほうが別のより適切な表現をたくさん知っているからであると回答している。これは研究協力者の英語の習熟度が初学者レベルであるため、日英、英日語間の交換が逐語的なものにとどまっているためであると推測する。

6. まとめと今後の展望

先に提示した本実験の目的を次に再掲する。

- ① 初学者レベルの日本人英語学習者にも第二言語の第一言語への影響が見られるか検証すること
- ② その影響が見られやすい文法項目を指摘すること
- ③ そのような影響について学習者自身ができるように認識しているかについて明らかにする

今回実施した属性調査アンケート及び容認度判断課題の結果から、初学者レベルの英語学習者について以下のことがわかった。

まず、①については、そのような影響とみられる現象は観察された。しかし、英語または現代文を得意科目としている者は日本語文の容認度について正しく評価する傾向があったため、逆行転移と結論づけるためには更なる検討が必要である。また、問題文を、最も不適切に評価した最下位2名は英語を苦手科目であると回答したことから、羅 (2015b) の「第二言語の習得レベルが入門から初級レベルの者が逆行転移の度合いが強い」という主張は支持できるという結論を導き出した。

次に、②については、英語と日本語の事実志向型と立場志向型の別から生じる差異が問題となる文での容認度が低かったことから、事実志向、立場志向の違いが重要となる主語の立て方や文づくりが逆行転移現象の研究をする場合のターゲットグラマーとして適しているのではないかとこの構想を得た。

また、③について、参加者全員が英語学習の母語への影響について「ある」と考えており、しかもそのうちの7割が、その影響はポジティブであると考えていることがわかった。

最後に今後の後続実験の展望について述べる。本稿の実験では人数が少なく、英語力を示す資格試験等を多くの参加者が受験していなかったため、英語力と回答結果との相関を、比較・分析できなかつたことから、後続実験においては、英語力診断テストを実施した上でより多くの参加者からデータ収集をし、定量的に考察することが可能な規模で再実験を実施する。また、英語母語話者の日本語学習者が産出しない「非用」としてあげられている文法項目については、今回のような単文かつ短文の容認度判断アンケートには馴染まず、より文脈情報を充実させた問題文を用いたテスト、あるいは産出テストでデータ収集をするべきであろう。予定している後続実験においてはこれらの点を改善してデータ収集をする予定である。

本稿の内容は、2019年6月に中央大学多摩キャンパスで開催された、日本第二言語習得学会 第19年次大会でポスター発表された内容を基に、若干の加筆を加えたものである。

参 考 文 献

- Cook, G. 著, 斎藤兆史・北 和文 訳 (2012). 『英語教育と「和訳」の効用』. 東京: 研究社.
- Cook, V. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multi-competence. *Second Language Research*, 7(2), 103-117.
- Cook, V. (1996). Competence and multi-competence. *Performance and Competence in Second Language Acquisition*, 57-69. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, V. (2005). Multi-competence: Black hole or wormhole? *Draft of Write-up of Second Language Research Paper*, 2005.
- Cook, V. (2016). *The Cambridge Handbook of Linguistic Multi-Competence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kinberg, M. (2005). Bilingualism as mutually in adult second language learners. *Proceedings of the 4th International Symposium on Bilingualism*, 1190-1200.
- Laufer, B., & Nation, P. (2016). *Vocabulary levels test (Productive)*. Retrieved August 30, 2018, from <https://www.lexutor.ca/tests/levels/productive/>.
- 英語4技能 資格・検定試験懇談会 (n.d.). 「新たな英語教育のための改革とその背景」. 『英語4技能試験情報サイト』. 2018年8月29日検索. <http://4skills.jp/education/neweducation.html>.
- オドリン, テレンス著, 丹下省吾 訳 (1995). 『言語転移 言語学習における通言語的影響』. 東京: リーベル出版.
- 白畑知彦・鈴木孝明 (2017). 『第二言語習得 キーワード事典』. 東京: 開拓社.
- 鈴木恵理子 (2013). 「中国人日本語学習者の逆行転移—日本滞在期間に注目して—」『秋田大学国際交流センター紀要2』, 3-18.
- 水谷信子 (1985). 『日英比較 話しことばの文法』. 東京: くろしお出版.
- 村端二郎・村端佳子 (2016). 『第2言語ユーザのことばと心—マルチコンピテンスからの提言』. 東京: 開拓社.
- 山田恵美子 (2010). 「第二言語が母語に与える影響—断り発話の分析から—」. 『NEAR conference proceedings working papers NEAR』 2010-11, 北東アジア言語教育学会, 1-15.
- 山本大貴・宮川友梨 (2023). 「日本の中学校における英作文の指導が生徒の日本語による作文に与える影響」. 『外国語教育メディア学会中部支部研究紀要』 33, 17-26.
- 尹 テレサ (2016). 「第二言語から第一言語への言語転移現象に関する実証的研究—韓国人日本語学習者の「てもらう [a/eo batda]」表現に注目して—」. 東京学芸大学大学院博士論文.
- 羅 沢宇 (2015a). 「目標言語から母語への逆向転移の実例—日本語から中国語へ」. 『静岡文化芸術大学研究紀要』 15, 89-96.
- 羅 沢宇 (2015b). 「逆向干渉の度合いと非実験者の社会的属性について—実験結果から—」. 『静岡文化芸術大学研究紀要』 16, 55-61.
- 羅 沢宇 (2016). 「外国語学習者の「逆向転移」に関する評価と認識—インタビュー実験の結果を踏まえて—」. 『静岡文化芸術大学研究紀要』 17, 23-29.

添付資料

資料① 属性調査アンケートの質問項目

資料② 容認度判断アンケート（例として2ページ分のみ掲載）

資料③ 産出語彙レベルテスト（2,000語レベル）（Laufer & Nation, 2016より）

資料①

1, 英語に関する試験のスコアや合格した級を教えてください。

同種の試験を受験している場合は最新のものを書いてください。

試験名	取得したスコア, 級等	取得時期 (年月)	
TOEIC LR		年	月
TOEIC SW		年	月
TOEFL		年	月
英検		年	月
Progress		年	月
Versant		年	月
その他		年	月

2, 英語に関係する科目や授業で英語を使用する科目を現在どれくらい履修していますか？

() コマ

3, 普段, 講義以外でどのくらい英語の学習をしていますか？

週 () 時間程度

4, 普段, 学習以外で英語に触れる機会がありますか？

あればどれくらいの時間ですか？

①ある 週 () 時間程度 ②ない

5, 海外滞在経験はありますか？あればどれくらいの期間いましたか？

複数あれば長いものから順に。

時期	期間	国・地域名	目的
例.) 27歳のとき	1か月	カナダ	語学研修

6, 日本語以外が母語の人と同居していますか？

もしあればその人は何語の母語話者で、普段家でその言語を話していますか？

- ① いる () 語 普段家でその言語を話して (いる・いない)
② いない

7, 学校教育における得意科目、及び苦手科目はなんですか？回答欄に以下の数字を書いて回答してください。(複数回答可)

- ① 英語 ② 現代文 ③ 古典 ④ 歴史 ⑤ 地理 ⑥ 公民 ⑦ 物理 ⑧ 化学
⑨ 地学 ⑩ 生物 ⑪ 数学

得意科目	
苦手科目	

8, 日本語の作文指導を受けた経験はありますか？(塾・予備校含)

- ① ある ② ない

9, 日本語の読書習慣はありますか？

また、どのような本をよく読みますか？(小説, 評論, エッセイ, 新聞等)

- ①ある 週 () 時間程度 ②ない

本の種類 ()

10, 普段、日本語で文章を書く習慣はありますか？

(日記, ブログ, Twitter, 授業で課される課題等)

- ①ある 週 () 時間程度 ②ない
月 () 時間程度
年 () 時間程度

11, 日本語での読み書きは好きですか？

- ①好き ②嫌い ③どちらでもない

12, 英語学習は、学習者の日本語に影響を与えますか？

また、その影響はポジティブなものだと思いますか？ネガティブなものだと思いますか？

影響があると、 ①思う ②思わない

その影響は、 ①ポジティブ ②ネガティブ

資料②

1, 【状況】 電車内で足を踏まれて。

誰かが私の足を踏んだ。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

2, 【状況】 家に空き巣が入って。

誰かが、 / ドロボーが、 私の部屋に入った。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

3, 【状況】 電車で財布がないのに気づいて。

私の財布がとられた。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

4, お隣の人がこれを私の子どもにあげました。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

5, 隣の人が私の子どもを世話してあげました。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

6, 母が私にセーターを送りました。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

7, 母が私に冬の衣類を送った。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

8, 私は昨日、新宿で映画をみました。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

9, 【状況】 他人の考えを他者に伝えるときに。

あの人はいいと思います。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

10, 私は何時にくるはずですか？

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

11, 【状況】 日本のサラリーマンの生活習慣を説明する という文脈で。

うちへ帰るとき着替えます。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

12, 疲れるとき、お茶を飲みます。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

13, 元気だったと言いました。

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

14, 発展された国

1	2	3	4	5	6
自然					不自然

資料③

それぞれの文の空欄に入る英単語1語を解答欄へ書きなさい。ただし、それぞれ指示されたスペルで始まる英単語を書くこと。

No.	英文	解答欄
1.	I'm glad we had this [opp _____] to talk.	
2.	There are a [doz _____] eggs in the basket.	
3.	Every working person must pay income [t _____].	
4.	The pirates buried the [trea _____] on a desert island.	
5.	Her beauty and [ch _____] had a powerful effect on men.	
6.	[La _____] of rain led to a shortage of water in the city.	
7.	He takes [cr _____] and sugar in his coffee.	
8.	The rich man died and left all his [we _____] to his son.	
9.	[Pup _____] must hand in their papers by the end of the week.	
10.	This sweater is too tight. It needs to be [stret _____].	
11.	Ann [intro _____] her boyfriend to her mother.	
12.	Teenagers often [adm _____] and worship pop singers.	
13.	If you blow up that balloon any more it will [bu _____].	
14.	In order to be accepted into the university, he had to [impr _____] his grades.	
15.	The telegram was [deli _____] two hours after it had been sent.	
16.	The differences were so [sl _____] that they went unnoticed.	
17.	The dress you're wearing is [lov _____].	
18.	He wasn't very [popu _____] when he was a teenager, but he has many friends now.	